

さだまさしさん

山本健吉を偲び

「防人の詩」を捧げる



文芸評論家山本健吉さんの25回忌法要が5月7日(月)無量寿院(西古松町)で営まれ、生前親交のあった歌手のさだまさしさんが急きよ東京から駆け付け、山本さんが大好きだったという「防人の詩」を捧げました。法要に参列した約100人は、さださんの語る山本さんの思い出や歌に聞き入り、故人を偲びました。山本健吉さんは、黒木町出身の文芸評論家・石橋忍月の三男として長崎市に生まれました。同じ長崎市出身のさださんとは家族同然の付き合いをし、さださんの楽曲を高く評価しました。

●信じなさい、
僕が残すからね

山本先生とは同じ長崎市出身ということもあって、我が子のよう

に接してくれました。僕が『関白宣言』の歌を発表した頃はいろんな人から「軟弱だ」とか「暗い」など悪口を言われました。「防人の詩」を書いた時には、右翼的だとこぞつたたかれました。そんなときに山本先生は、新潮に「さだまさしをたたえる」という一文を書いてくれました。あの山本健吉先生が褒めてくれた、このことが、どれだけ僕の背骨を支えてくれたことか。

山本先生には、思い出がたくさんあります。「君はここにいなくなってしまった人のことを歌うのが上手だね。死んでしまった人が、よみがえったように目の前に浮かんでくる。挽歌といって死んだ人を讃える歌は、日本の詩歌の伝統なんだ。人に暗いだとか言われてもめげることなく、大切な人を失ったらその人の歌を書き続けていきなさい」と言われました。「防人の詩はね、必ず歴史に残るからね。信じなさい、僕が残すからね」と言われました。こんなに、同郷というだけでかわいがってもらいました。暗いとか重いか、からかわれることがあるけれど、山本先生のその言葉から迷わなくなりました。ちゃんと命を歌っていかねければと思いました。

山本先生と長崎市内を散策しながら「先



さだまさし
さんが語る
山本健吉の
思い出

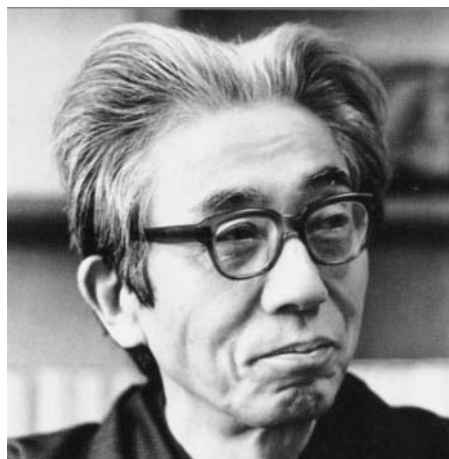
生にとって故郷とは何ですか。長崎とは先生にとってどんな街ですか、と尋ねたら、しばし考え

空を見上げ「母の街」とおっしゃいました。「僕にとって長崎は母の街なんだ。そして故郷というのは、僕がその街を記憶しているというだけではなく、街も僕を覚えてくれている、そう思える場所が故郷じゃないか」と言われました。

山本先生はなぜかさだまさしの歌が大好きで、酒を飲んだときによく『防人の詩』を歌ってくださいました。それはご詠歌のようにしか聞こえませんでしたけど(笑)。

●先生の居場所があることに、
ほっとしています

25年目の法要にお招きいただいたので、ありがたくお参りさせていただきました。墓前で遅くなつてすみませんと詫言いました。山本先生は、文学に貢献した、俳句にはものすごい力を注がれた、偉大な文学者です。あれだけの人が置き去りにされていたらどうしようとの恐怖心がありました。けれど、八女の無量寿院という立派なお寺で、地元の人たちが守ってくれている。ちゃんと先生の居場所があることに、ほっとしています。八女の皆様に大変感謝しています。



堺屋内にある「山本健吉夢中落花文庫」

山本 健吉 (1907 ~ 1988)

文芸評論家。文芸評論家石橋忍月（黒木町出身）の三男として長崎市に生まれる。本名は石橋貞吉。慶應義塾大学文科予科に入学。在学中、教授であった折口信夫（釈道空）に感化を受ける。卒業後、改造社に入社。雑誌「俳句研究」に携わり、俳句批評に精進する契機となる。昭和14年中村光夫らと「批評」を創刊。同詩に連載したエッセーを集め、昭和18年初めての評論集『私小説作家論』を刊行。

戦後、京都日日新聞文化部長や角川書店編集長などをしながら文筆を志す。昭和30年『芭蕉』で新潮社文学賞受賞。翌31年『古典と現代文学』で読売文学賞を受賞するなど、批評家としての地位を確立。その後も古典文学に関するすぐれた評論を発表し、昭和47年日本文芸家協会理事長に就任。昭和58年文化勲章を受章。

国文学の豊かな素養をもつ数少ない評論家として、古典から現代まで鋭い評論活動を展開した。俳句の研究でも知られる。代表作として『柿本人麻呂』（読売文学賞受賞）や『詩の自覚の歴史』（日本文学大賞受賞）『いのちとたち』（野間文芸賞受賞）などがある。昭和63年5月7日、81歳で死去。墓は浄土宗若泰山光明寺無量寿院（八女市本町）にある。



展示されている山本氏の愛用品

7月5日（健吉の命日に）堺屋（八女市本町）

ご先祖以来の八女市への縁を大事にされる山本健吉さんの遺族のご好意により、平成3年から現在に至るまで、一般資料4694点、書籍1150冊、写真資料6464点の総数1万2308点が八女市に寄贈されました。八女市では、平成

184)内に「山本健吉 夢中落花文庫」を開館しました。「夢中落花」とは、平安時代末期の歌人である西行の和歌集「山家集」の中の「春風の花をちらす」と見る夢は覚めても胸のさわぐなりけり」の詞書きにある語で、山本さんが生前好んで書かれた言葉でした。館内は1階に山本健吉の遺愛の品やノート類、2階には父・石橋忍月に関する資料や妻で俳人の石橋秀野に関する資料などを展示しています。文庫前に建立された夫婦歌碑も併せてご覧下さい。入場無料。



思い出の写真

寄り添う
夫婦歌碑



堺屋内には、山本健吉・石橋秀野夫妻の夫婦歌碑があります。建立には全国から寄付金が寄せられ、さだまさしさんは健吉に贈る歌「夢したれ」を作詞・作曲しました。句はともに二人の辞世の句です。

「ごぶし咲く昨日の今日となりしかな」健吉
「蝉時雨 兎は擔送車に追ひつげず」秀野

石橋家のお墓を守る
黒木町文化連盟

石橋忍月・山本健吉・石橋秀野が眠る『石橋家累代之墓』の清掃を、黒木町文化連盟は山本健吉の命日である5月7日に毎年行っています。

石橋忍月と三男の山本健吉とともに文芸評論家。黒木町湯辺田にあった忍月の生家は、学びの館（黒木町今）の敷地内に移築され、「石橋忍月文学資料館」として整備されています。同文化連盟では、「八女市に縁のある石橋忍月と山本健吉の有名な二人の文学者を広く市民に伝えていきたい」と心を込めて清掃を続けています。

